

---

# Princess

sarsha

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Princess

### 【NZコード】

N59460

### 【作者名】

sarsha

### 【あらすじ】

あるところに、それは美しいお姫様がありました。そのお姫様は堀に囲まれたお屋敷で、大切に、大切に、守られて暮らしていました。そして、そのお姫様は、いつでもこう思っていたのです。誰にでも幸せになるチャンスがある。素敵なお姫様と、恋に落ちたその瞬間から、本物のプリンセスになれると

## 第1話 事の始まり

「だから？」

「だから、つて？」

「…だから…ビリして欲しいのか仰つて下さる…」

朝からお屋敷の中は忙しかった。メイドたちはオロオロと屋敷中を走り回り、この事態をどうしようか悩まされていた。その原因といつのがこのお屋敷の王女にあった。

「そんな…今言つたありのままよ。ねえ、あなた」

「ああ、そのままだ」

朝食のテーブルの反対側に座つている国王と王妃はにこやかに微笑みながら朝食を口に運んだ。国王たちとは裏腹に暗い表情をしていたのは、この国の王女であるアウラ王女だった。ため息を吐きながら、ゆっくりと朝食を食べ始めた。控えているメイドたちも、依然落ち着きなく立つて見ていた。

舞台はある時代のヨーロッパ。その中で、とても小さな国が、争いもなく平和な暮らしを送っていた。その国こそ、ここ、シャラルテッド王国。

他の国に比べたら、決して裕福であるとは言えなかつた。しかし、自然と人の温かさだけは、どの国にも劣つていなかつた。国の真ん

中に建つていいのが、シャラルテッド王国の王家のお屋敷グレインティード城である。国王の娘、アウラは来月で18歳の誕生日を迎える。アウラがお屋敷の外に出ることは滅多になく、教養は全て世話係が行つてきた。たとえキレイに着飾つたって、いくらお作法が良くなつて、常に独りぼっちだった。

「来月は王女様のお誕生日の式典がござります。そこには近隣の王国から王女様とお年の近い王子様が何人か出席されます故、今朝、国王様と王妃様が仰られていたように」

「要は、その中から結婚相手を選べと言いたいのでしょ、エリーヌ？」

アウラの臥室では、メイドたちがアウラの着替えの手伝いをし、世話係のエリーヌが来月に控えた誕生式典の概要を説明していた。アウラは美しいドレスに着替え終わると、エリーヌと向かい合い、姿勢を正して立つた。

「仰る通りでござります、アウラ王女様」

「お父様もお母様もそういう言えぱいいものを。好意を持った殿方を1人選びなさい、だなんて、まわりくどい言い方」

アウラは部屋から出ると、大広間へと向かつた。その後ろからはエリーヌを先頭として数名のメイドが付いて来た。どこに行くにしても、必ずエリーヌとメイドたちが付いて来る。アウラはそれが嫌でしきりがなかつた。自由な時間や、息抜きできる時間など数分もない。あると言えば、寝ているときだらうか。

大広間に着くと、扉の前に立つていた2人の執事がゆつくりと扉

を開け、深々とお辞儀をした。

「…ありがとうございます」

2人の真ん中で一旦立ち止まると、アウラは礼の言葉を述べた。大広間に入ると、そこにはすでに十数名の弦楽団が揃っていた。それを見たアウラは横目でエリーヌを見て言った。

「エリーヌ、早く始めましょう」

「わかりました。それでは、まずステップの確認から行いましょう」

数日前から、式典に向けてのワルツのレッスンが日課になつた。ワルツを踊る時は必ず着替えて行つた。朝食の後に毎日2時間。式典まで毎日レッスンが行われた。その間、エリーヌは大広間の片隅でその様子をじっと見守つていた。キレイなワルツの音色に乗り、ステップを覚えることなど、アウラにとつては簡単なことだつた。

「アウラ王女様、今日は、今から中庭の方へお散歩に出かけてはいかがでしょう。お天気も素晴らしいですし」

ワルツのレッスンが終わると同時に、エリーヌが提案した。アウラは大広間の窓から外を眺めた。

「…そうね。けれど、たまには堀の向こう側にも行ってみたいわ」

「アウラ王女様っ…」

「何気なく言つたアウラの一言に、ヒリー・ヌは困つたように反応した。

「わかつてゐるわ。私は鳥かごの中の鳥。大人しくしていればいいのよ」

アウラはそう言つと、大広間を出て自室へと向かった。その後に続いて、やはりメイドたちが付いて行つた。今回ヒリー・ヌだけはその場に留まり、弦楽団と当日の打ち合せをした。

「アウラ王女様の誕生式典？」

シャラルテッド王国の隣の国ルーン国では、1人の王子が、アウラの誕生式典が来月催されることを知らされていた。王宮の中庭で剣の練習をしているところに、執事が文書を持ってやって来たのだ。王子は動きを止めずに、剣の素振りをしながら執事の話を聞いていた。

「はい。何でも、18歳になられるアウラ王女の誕生を祝うとともに…」

「婚約相手を探すとでも書いてあるか？」

執事が言葉に詰まつていると、王子が代わりに何気なく言つてみた。その言葉を聞くと、執事はふと王子の顔を見た。執事は黙つて文書をしまうと、咳払いをした。

「アレ? 本当に?.. 適当に言つただけなんだけど」

王子は剣を腰にしまつと、王宮の中に入つて行つた。その後を慌てて執事が追いかけた。

「ど、どうなさりますか？」

王子は急に立ち止り、踵を返して執事に向き合ひつと、指差して言った。

「どうするも何も、会つたこともないような人を祝つているほど僕に暇はない。よって、お断りだ」

「しかし……！」

「悪いが、僕はどこか遠くの戦地に送られたとでも言つて一重に断りしておいてくれ、クリス君」

そう言つと王子は自分の部屋の中に入つてしまつた。クリスはドアが閉められているのもお構いなしに深くお辞儀をして答えた。

「仰せの通りに……ルイス王子」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5946o/>

---

Princess

2010年11月2日11時58分発行